

# 台湾山地同胞(旧台湾高砂族)とキリスト教

坂本 進

〔論文要旨〕 本稿は台湾山地同胞(旧高砂族)とキリスト教との関係を解明する研究報告である。台湾山地同胞は、中華民国政府に台湾が返還されて以後、その名称を日本統治時代の「高砂族」から「山地同胞」と民国政府によって改称された。山地同胞の研究は、後藤新平台湾民政長官時代に伊能嘉矩氏が着手されて以来、日本人研究者によって進められ多大な成果を収めてきた。しかし返還後の山地同胞の生活がどう変化したかという事、特にその80%がクリスチャンとなっているという事実はあまり知られていない。本稿において、山地同胞とキリスト教との関係を、宗教社会学と文化人類学・両学に共通する視点から考察し、併せ現在の台湾山地同胞の生活を紹介したいと思う。筆者は現在中華民国台湾に居住し、山地同胞主要九族の部落を訪れ、彼らがクリスチャンであり筆者もカトリック神父として信仰を同じくする所から、共に生活する機会を持つことができた。本稿が山地同胞研究への新しい展望に寄与できれば望外の幸いである。

〔キーワード〕 台湾山地同胞(旧台湾高砂族)、言語、光復、土着化(Indigenization)、平地人と山人、山地問題、溝通、天主教、長老派、真耶蘇教、

## 第一章 台湾山地同胞(旧高砂族)の研究の動向と本稿の視点の提示

台湾山地同胞の研究は、台湾が日本の統治下に置かれて以後第二次大戦に至るまで、日本の研究者によって主に進

められてきた。明治期における鳥居竜藏・昭和期における馬淵東一（本年一月なくなられた）両氏の文化人類学的・民俗学的研究は、その代表的研究とされている。<sup>(1)</sup>しかるに戦後中華民國に台湾が復帰（台湾では「光復」と呼ばれる）して以後、台湾山地同胞の生活上の変化は著しく、現在（一九八八年三月）では蘭嶼島に住むヤミ族を除いて、平地に住む一般の台湾人（平地人）と生活様式はほぼ変わらないものとなり、その研究方法にも変化がみられる。台湾の光復以後に於ける山地同胞に関する研究は、台湾大学及び中央研究院を中心として、主に中国人によって続けられ今に至っている。中華民國台湾が蒋介石の長男蔣経国前總統（本年一月十三日死去）の指導のもとに経済的発展を遂げたこの数十年における山地同胞の生活様式の変化は、特に著しいものがあり、山地同胞の研究は社会的変化に伴って文化人類学的視点から社会学的視点へと進められている。（文化人類学的視点とは、主に山地同胞の民族の起源・伝統的な生活様式（衣食住・風俗習慣）、思考方法・宗教等を研究する視点である。それに対し、社会学的視点とは、山地同胞をとりまく周囲の社会変化に伴う山地同胞の対応に焦点を据え研究する視点である。）一九五十年代後半以来台した文化人類学者イネズ・パークラー女史の來台後二十有余年にわたる山地同胞に関する研究論文集が、一九八六年（中華民國七十五年）台北の南天書店より英文で出版された。<sup>(2)</sup>外国人による文化人類学的視点（特に民俗学的視点）からの研究は女史の例にみられるように少なくない。<sup>(3)</sup>しかしここ数十年の趨勢は、人類学的視点から社会的視点への重点の移動が顕著である。研究上の重点の移動を示す好例として山地同胞の言語使用の変化の実例をあげることができる。現在台湾に於いては国語（北京官語）による言語統一がほぼ完成をみ、その結果山地同胞の子供達は属する種族の言語を十分に話せないという現象を生じさせている。五十五歳以上の人々が日本語教育を受けた第一世代とすれば<sup>(4)</sup>（種族言語と日本語を解す）、その子供達三十代の第二世代は光復後の国語による教育を受けた世代であり、彼らは両親の使用する種族の日常言語を話しても夫婦間では国語を日常語として用いている。従ってその夫婦から生まれた子供

達は親との会話には国語を用い、学校では一律に国語使用であることから、種族の言語を習う機会を失う。さらに山地に住む山地同胞は「原住民」・「高山族」・「山人」とも呼ばれており、英文は *aborigines* を用いている。）子弟の教育や就職の為に平地へと移住し、台湾の80ないし85%を占める台湾人（大陸中国から光復後移台した人を外省人と呼称するのに対し本省人と呼称される）の用いる福建省系の言語（閩南語―通称台湾語）を習う必要に迫られる。公用語としての国語の使用、及び日常会話としての台湾語の使用は、おのずから従来から使用してきた種族の言語を使用する機会を減少させずにはおかない。山地語使用の減少が意味するものは何か？文化遺産として最も基本的なものである言語使用の後退は、伝統的な山地同胞の生活様式・物の考え方・性格・宗教にも変化を与えずにはおかない。一例として示した言語の用いられ方の変化（種族言語使用の後退）は、畢竟人類学的視点から社会学的視点への重点の移動――換言すれば、山地同胞をとりまく社会の変化に対して、山地同胞がその伝統的文化と社会学の変動との関係をどう展開させていくかに視点を据える、いわば社会学、人類学研究とでもいえる分野に道を開かせることになる（イギリス流の *social anthropology* ではなく）。

光復後の山地同胞についての研究は、中国民俗学会が編集した「光復以来台湾地区出版人類学論著目録」（一九八三年・黄応貴編）によって、一括して概梗と動向を知ることができる。さらに最新の山地同胞に関する総合的な研究会の手引き書として編纂された『台湾土著社会文化研究論文集』（黄応貴編・一九八六年・聯経出版）から、文化人類学・社会学・宗教学各分野に於いて研究された山地同胞研究の成果と展望を鳥瞰することができる。<sup>(5)</sup>

以上の動向と趨勢を踏まえつつ、社会学的人类学とでもいえる視点に立脚させて、山地同胞とキリスト教の関係についての研究報告を進めたいと思う。

## 第二章 山地同胞とキリスト教

社会的、人類学といえる視点を進めた台湾大学社会学研究所・人類学研究所・及び中央研究院は、再三にわたり山地同胞の社会変動に対応する生活調査を行ったが、その中で注目された調査対象の一つは山地同胞とキリスト教との関係をめぐるものであった。それは、山地同胞の80%がカトリック・プロテスタントのクリスチャンであることによる<sup>(7)</sup>。一九〇〇年以降、伝統的な土着の宗教に漢族の宗教・及び日本の神道が加えられ山地同胞の宗教は形成されてきたが、光復後欧米の宣教師による山地伝道が促進されたことにより、山地同胞の宗教は急速にキリスト教化されるに至った<sup>(8)</sup>。現在・台湾の人口は約二千万人であり、クリスチャン人口はプロテスタント約三十一万・カトリック約二十九万計六十万を数えている。日本が人口一億三千万に対しクリスチャン人口総計百二十万であることと比べると信者の比率は高いといえる。中華民国建国の父孫文・前総統蔣介石・蔣経国父子・現総統李登輝（台湾省出身）はいずれもクリスチャンであり、台湾におけるキリスト教の発展と間接的に関係を持つているように思われる。このクリスチャン人口六十万余の約四割が山地同胞で占められている<sup>(10)</sup>。

台湾の総人口二千万の内訳は、本省人である台湾人が85%、光復後移住した中国大陆からの外省人が13%、原住民族としての山地同胞が2%弱となっている<sup>(11)</sup>。台湾人85%の中には福建省系の閩南語を話す台湾人と広東語系の言葉を話す客家人とが含まれている。（客家人は台湾語を解する）台湾原住民（山地同胞）の人口統計は清朝及び日本の領台当初は不詳であったが、台湾総督府は正確な戸口調査を行い、大正十一年の統計において戸数二万二千五百・人口約十三万二千人を記している。著名な山地同胞の抗日事件「霧社事件」の発生した昭和五年には七百十一ヶ村・二万三千

九百戸数・人口約十四万五百人を記している。総人口に対する比率は約二%であった。<sup>(12)</sup> 領台後の山地同胞のクリスチャン総数の変遷を示す資料は定かではない。光復以前にカトリック信者がいた事実は、現存している信者の人々からの証言で明らかであるが、領台後の日本政府は山地同胞の人々を神道に強制改宗させようとしたこと<sup>(13)</sup>もあって、公けには信者数を知ることができなかった。プロテスタント信者数の統計は、プロテスタント・長老派教会の資料が残されている所から概数をつかむことができる。<sup>(14)</sup> 霧社事件のあった昭和五年に山地系台湾人の間に伝道運動が起った（芝苑というタロコの一女性信者を中心として）という記事がみられるところからも、少なくない信者が入信していたと思われる。<sup>(15)</sup> 参考までに、光復までの台湾のクリスチャン人口を挙げれば以下のようになる。台南神学院教授鄭兎玉氏の調査によれば、一八九五年日本による領台直前の台湾の総人口は約三百万・カトリック（天主教）約二千・プロテスタント（基督教）約八千で総計約一万・人口比百分率は0・3%であった。霧社事件発生の昭和五年の総人口は四六〇万、天主教六千四百・基督教四万二千人で百分率は一・一%。終戦直前の教勢は、総人口六六〇万に対し天主教八千二百・基督教六万四千六百で総計約七万三千、百分率は一・一であった。戦後の一九七五年に於ける統計は、総人口千六百万、天主教二十八万五千・基督教三十二万・総計約六十二万で百分率は3・3%となっている。<sup>(16)</sup>

光復後の山地同胞のクリスチャン人口の推移を、台湾に於ける文化人類学研究の第一人者として知られる李亦園教授の資料と詳細な信者数動向の調査を行った郭文般氏の資料に基づいて、一覽すると次のように示される。<sup>(17)</sup>

また、光復後建堂された教会数についての資料統計は次の通りである。<sup>(18)</sup>

これらの資料から知られることは、一九四五年から五六年にかけての十年間、教会設立が急増し亦信者数が急増したことである。爾来台湾にキリスト教が伝えられたのは、大陸中国へイエズス会土利馬竇（マテオ・リッチ）が入京（北京）後二十五年経った一六二六年のことであった。スペイン人ドミニコ会宣教師により伝えられた。プロテスタ

表1 年代別キリスト者人口表

年 度	1945	1960	1965	1970	1975	1980	1987
天 主 教	○	48,550	78,880	89,150	85,880	89,060	13万
長 老 派	不詳	63,850	72,550	72,350	60,190	67,700	不詳
真 耶 蘇 教	不詳	10,100	13,060	14,170	15,450	15,720	不詳
諸 派	不詳	8,540	11,470	12,250	11,260	12,030	不詳
合 計	不詳	13.1万	17.6万	18.8万	17.3万	18.5万	不詳
山 地 人 口	17万	21万	24万	26.7万	28.5万	30万	33万
百 分 比	/	62%	73%	73%	61%	61%	不詳

表2 台湾に於ける三大キリスト教教派の年代別教会設立数

年 代	天 主 教	長 老 派	真 耶 蘇 教	合 計
1945以前	0	60	1	61
1945~1948	14	105	29	148
1949~1952	32	118	34	184
1953~1956	199	61	16	276
1957~1960	30	13	7	50
1961~1964	4	2	4	10
1965以後	0	0	2	2
	279	359	93	731

ントの教えも時を同じくして、一六二七年領台した宗主国オランダ人改革派宣教師により伝えられた。台湾におけるキリスト教は、清代に禁教迫害がみられたものの、日本におけるキリシタン弾圧・鎖国という苛酷な事態には至らず、キリスト教信仰は山地系台湾人・漢族台湾人を問わず継承されていった。日本領台後の山地系台湾人キリスト者の趨勢は、プロテスタントが主流を占めカトリックはほとんどみられなかった<sup>(19)</sup>。「資料表2」から知られるように一九四五年以前設立の日本領台後における山地系カトリック教会はほとんど皆無に近かった。では、一九四五年以後の十年間、カトリック・プロテスタント両派を含めてキリスト教が山地系台湾人(旧高砂族)の人々にかくも広く受け入れられていった原因は何であ

ったのか？

### 第三章 キリスト教受容の理由

一六二六年スペインのドミニコ教団によりカトリックが主に山地系台湾人の間に伝えられていった時・その改宗形態は全て集団改宗であったといわれている。台湾の住民にとっては、外来者（スペイン人若しくはオランダ人）と友好的になることは、集団改宗を通して、外来者の宗教を平和に受け入れることを意味した。キリスト教と外国人の支配を同時に受容していったゆえんである<sup>(20)</sup>。では、光復後旧高砂族がキリスト教を受容していった理由も、三百年前と軌を一にしているのであろうか。

台湾原住民としての山地同胞が宗教としたものは、彼らの生産活動の中心・農業と結びつく自然宗教・アニミズムであった<sup>(21)</sup>。スペイン・オランダによるキリスト教の伝道・一六六二年以降「鄭成功」來台後の漢民族による三教（儒教・仏教・道教）の伝教、日本統治下における日本神道及び仏教の伝教等の影響を受けつつも、その宗教生活の中心は生産活動の中心・農業と結びつくアニミズムの形態をもった自然宗教に帰せられる。キリスト教人口80%以上を占める現在の山地同胞各族において、依然として自然宗教的形態を持つ宗教儀礼・豊年祭が最大の行事として祝われていることは、この一証左である。日本においては、大多数のプロテスタント派において、特に信仰の純粹性が強調され、日本古来の自然宗教的な宗教儀礼は偶像崇拜として否定されがちであるのと好対照である。生活の中心である生産活動（経済機能）と繋がる、農耕生産過程の一部としての宗教通過儀礼は、キリスト教に改宗した後も生産形態が変化しない限り続けられ得る。しかし、宗教通過儀礼は格別、キリスト教が光復後急速に受容をみ広まっていったのは

何故であろうか？ 二つの理由が挙げられている。一つは、経済的理由に基づくものである。宗教における救いとは本来物心両面にわたるものである。第二次大戦後、台湾は中国本国に返還された。中国は戦勝国であったが、長い戦争によって疲弊し物資は著しく窮乏していた。アメリカを中心とする欧米のキリスト教国家は、日本の軍国主義から解放された台湾に多数の宣教師を派遣してキリスト教化を推進させ、伝道の助けとして物質的利益を教会が享受できるように配慮した。光復後、祖国中国・漢族の伝統的三教が伸張せず、キリスト教が伸張したとされている所以である。<sup>(23)</sup>（進駐軍にメリケン紛や衣類を配給され、信者になったという話は、日本と時を同じくしている。）従って、台湾経済が発展するに伴い平地人（山地人に対し漢族系台湾人を指す）にみられるのと同様に、山地同胞のキリスト教の伸びもとまり却って減少化の傾向を辿るに至っていることは必然的帰趨といえよう。<sup>(24)</sup>

山地同胞のキリスト教受容の他の理由は、精神的理由に基づくものである。光復後、日本の統治から離れた彼らは、それまで享受していた日本時代の教育・行政指導などによる精神的支えを一時喪失し、それにかわるべきものを見出せない状況に置かれていた。半ば強制されたものであったにせよ、日本政府による山地同胞に対する日本精神の薫陶は、山地同胞にとって民族の統合を果す精神的な役割をあるていど担っていたといえよう。光復後四十二年を経た今でも、なお少なくない山地同胞の人々が、日本の統治時代のことを好意を持って追想してくれることから証示される。<sup>(26)</sup>キリスト教の急速な受容は、この精神的支えの空白をうめることと関係があった。さらに、キリスト教の教えの内容そのものが精神的支えたりうるものであったことも、<sup>(27)</sup>受容に道を開かせた大きな原因であったといえる。ただし、一般的にキリスト教受容の理由とされている二局面を、さらにほり下げていくと次のような展開をみる事ができる。一九八五年台湾大学社会学修士論文として提出された郭文般氏の「光復後の山地社会に於けるキリスト教の変遷」は、最新の資料をもとに山地同胞の人々のキリスト教受容の原因を詳細に考察している。同論文を手引きとし

て、問題をほり下げてみたい。同論文は、光復以前にプロテスタント派を山地同胞が受け容れていった説明からはじめている。昭和五年の「霧社事件」を最後として山地同胞の抗日運動は終結し、彼らは「平和的民族」となった。日本政府は清朝によって進められた山地同胞（蕃族と呼ばれた）の教化を促進し、迷信の禁止・首狩りの禁止・部落間の戦争の禁止を実行させた。経済面に於いては狩猟の生活から定住・農耕生活への移転を推進、土地の登記制度・土地私有制度の確立へと道を進ませた。しかし、山地同胞の団結心・団体的性格は漢人系台湾人に比べて弱いところがあった。それは従来部の集団を日本政府により破壊され、新たな集団形態組織を自らの手によりつくる力に欠けていたからである。漢人は、民間宗教を通して、人的・財的両面を併せもつ強固な集団を形成させていたが、山地人は平地人と同様の形態をとることをいさぎよしとせず、山地伝教を開始したプロテスタント派のキリスト教に団体性を強化するいしづえ礎を据えたのである。従って経済的生産形態を定住農耕生活に切りかえて以後、キリスト教は集団組織強化の役割を担うものとして受容されていったとみることができ(28)。かかる山地同胞とキリスト教の関係を、集団組織の諸機能と関連させて把える視点は、光復以後の山地同胞研究者が等しく指摘する視点である(29)。

光復後、キリスト教の進展には目ざましいものがあつた。主要三派である天主教（カトリック）、基督教長老派・基督教真耶蘇教は急速に山地同胞の間に広まるに至つた。光復直後の物資の窮乏著しい状況下にあつて、国際修道会を擁するカトリック天主教会は多くの物的援助を行った。これは、山地に天主教が急速に広まった主要な原因を形づくらせた。基督教（プロテスタント教会）に於ても、外国人宣教師の物的援助があいまって、その伸びは急増していった。物的援助のみならず、病氣や災害・精神的苦しみに陥つた時、キリスト教会が彼らを助けたことも亦またキリスト教入信への大きな動機となつた(30)。

光復まもなく、教会が山地同胞の人々にどのような援助をしたかについて、山地同胞の一部族であるブヌン族出身

の天主教神父はこう語っている。「宣教師の方々は、精力を傾けて山地同胞の生活の向上と改善に努力され、我々の住居の改善をはかり、農業の生産向上をはかる為の耕耘機を買入れてくれた。」<sup>(31)</sup>その結果・山地の人々の宗教心は極めて熱心となり、警察は、村人が警察の話より宣教師の話をよく聴くので怨みを抱いた、と伝えられたほどであった。<sup>(32)</sup>

「天主教の神父は、非常に山地同胞信者の職業問題に心を配った。天主教と長老派はカテキズム（キリスト教理）を教える現地人宣教師養成の為の学校を設立し、小学校或いは中学校卒業の者を入学させ費用は無償とし、卒業後は良好な職業につけるよう心を配った。天主教と長老派は、亦病院を創設し貧しい山胞の治療の費用を免じた。」<sup>(33)</sup>しかし資料は、山胞が宣教師を受け入れたのは、物的援助を通してみせた宣教師の人格と精神に感化されたゆえであったことも記している。<sup>(34)</sup>真耶蘇教は中国人だけによって組織された邦人キリスト教会である。それ故、外国人宣教師のように物的経済援助を行うことによって入信に導くという道はとりえなかった。しかし急速な発展をみたのは何故であるか？ 真耶蘇教は一九〇六年にアメリカでおこった聖霊降臨運動（ペンテコステ・ムーブメント）の流れをくむものとキリスト教界ではみられている。真耶蘇教の教理によれば、一九一七年北京で三人の中国人信徒に聖霊がくだり教会が創立<sup>(35)</sup>をみたことが記されている。<sup>(36)</sup>一九二六年台湾伝道が開始され、一九三七年には山地同胞伝道が開始された。聖霊の導きに従い、自立・自養・自伝の三自を掲げ、外国から援助を一切受けることなく信者は収入の十分の一を教会に捧げ、教会を中心とする生活に徹底している。熱心に神を信仰する生活態度及び宣教と人々に対する奉仕への熱意が、山胞の人々をして真耶蘇教の受容に至らしめたこととみることができよう。教勢拡大の理由としては、相互扶助にもとづく共同体の形成を強調し山胞の団体的結束力を促進させたこと<sup>(1)</sup>及びその徹底した信徒主体の自主的宣教の熱烈さ<sup>(2)</sup>が挙げられよう。<sup>(37)</sup>物的欠乏のみならず精神的空白下にも置かれていた山胞の人々に、真耶蘇教が受容されていたのは、かかる精神の高揚を、奉仕の生活態度を通して与えたからであったといえよう。一九七〇年以降経済面

の生活向上が政府によって計られて以後、天主教・基督教の信徒数が漸次減少傾向を辿る中で、真耶穌教だけは減少をみせず、現有勢力を確保しさらに若干の増加を場所によりみせるに至っているゆえんでもある。

#### 第四章 一九七〇年代以降の社会変化とキリスト教の役割の変遷

一九七〇年代以降の山地地区におけるキリスト教教勢の漸減化現象について、郭論文及び天主教・基督教各資料は、民国政府による経済生活レベルアップの成功に伴うキリスト教会の物的役割の終焉(38)を告げている。民国政府は、民国四十三年（一九五四年）より「民政庁接管平地山胞輔導工作」を開始、山地社会の安定化への道を進めた。「山地三大運動」はその具体的なあらわれであった。第一運動は、山地を山地人民のものとする運動であった。（政府が、山地人が平地人により危害を受けないよう場所によって入山許可証を発行し、山胞の保護をはかったことも、この一つの具体化であった。現在も続けられており宣教師以外の外国人には許可証が与えられていない。）この運動は、民国四十年から四十三年まで続けられた。第二運動は、四十四年から四十七年まで続けられた「生活改善」の運動である。「生活改善」と呼ばれた運動は六つの目標が据えられ、(一)国語（北京官語）使用の促進、(二)衣生活の改善、(三)食生活の改善、(四)住生活の改善、(五)日常生活の改善、(六)風俗習慣の改革が各具体的内容とされた。<sup>(39)</sup>第三の運動・農業政策の改善は四十九年以後続けられて六十年代以後もお継続された。政府は山地の開発可能な土地を調査し土地改革を行い農業生産性の向上をはかり、さらに市場経済的しくみを導入させ資本主義化への道を一層促進させた。市場経済の導入は自給自足農業経済を基本とさせていた山地の生活に多大な変化を与えずにはおかなかった。<sup>(40)</sup>即ち、市場を通じて商品を手に入れる為の貨幣（金銭）を重視する傾向を促進させ、市場経済中心システムは家庭や村落におけるメ

ンバー（成員）の地位の伝統的序列に変更を与え、平地人と同様の生活水準を得る為、収入の途を平地で働くことに求め移動することを促進、さらに市場経済は平地との交流を推進させ、山胞の子弟をより高い教育の機会に参与させるための移動を促進させるに至った。<sup>(41)</sup> これらの生活上の変化は、キリスト教会の山地に於ける役割にも変更を生ぜずにはおかなかった。民国政府の積極的な山胞に対する生活上政策は成功をみ、その成功と教会の影響力の漸減化は表裏をなすものとなったとみることもできよう。しかし、山地におけるキリスト教会の役割は、物的役割の終焉が告げられたものの、時代に即応した新たな役割を支えられつつある。それは、急速な山地社会の変化に彼らにより良く対応できるよう精神的な援助を与える役割である。現在、急速な社会変化に伴なう過渡的<sup>7. 過渡的</sup>な諸々の「山地問題」が、台湾の社会問題として提示されている。例えば、山人所有の土地や農作物を平地人にだましとられる問題(1)、山人の子女を平地人が俗悪な仕事にあっせんする問題(2)、就職のあっせんや就業において山人が平地人から不正行為を受ける問題(3)等である。彼らは、民族性として元来単純・素朴・淡泊・大ざっぱで物にこだわらない性格<sup>(43)</sup>を持っていたが、キリスト教の教化によってそれらの善性がさらに助長され、人を愛し・信じる傾向を深化させた。この善良な性格が逆に被害者となりうる背景ともなった。昨年三月三人の平地人を殺害して死刑の執行を受けた一九歳の山胞少年の事件はその事例を示すものである。彼（山胞少年）はカトリックの家庭に育ち山地から台北へ上京して仕事を探していたが彼に就職をあっせんした平地人が彼をだましていたことを知り、怒って三人を殺害するに至った。（殺害後、少年は自首し罪に服した。）この事件は、単なる殺人事件としてでなく、山地同胞の人権と関わる事件として大きくクローズ・アップされた。<sup>(44)</sup> 結果は死刑であったが、カトリック教会をはじめとして宗教界・教育界・マスコミは等しく減刑を嘆願し、この事件のルーツに言及したのである。死刑に際して、蔣経国総統の特別な死刑執行に関する理由書が添付されマスコミに公表されたことは、その事情をよく示している。<sup>(45)</sup> 本件に関して、キリスト教会（天主

教・基督教共に）が社会問題としての「山地問題」に言及し、人権の擁護を訴え社会的弱者の立場を代弁し、教会の社会的役割を対外的に表明したことは、教会の新たな役割を示唆させるものであった。本年二月唯一の天主教大学である輔仁大学で開催された「中華民國第一回福音宣教大会」において、労働者の待遇の改善・公害の除去と環境保護・青少年の教育の問題及び山地問題の解決が、キリスト教宣教の具体的内容として提示されたことも、教会の現代社会に即応する社会的役割を示した具体的証左であったといえる。むしろ、既述したように山地問題を解決する主体者は民国政府であり、その多くの問題は政府の手によって既に解決をみているといっても過言ではない。（山人を保護しその人権を擁護することは、国父孫文の「三民主義」「大同思想」<sup>(47)</sup>に基づく中華民國憲第五條の「民族平等」の精神に由来するものである。）ヤミ族の住む蘭与島の生活が伝統的生活を部分に残しているのも、それは政府が彼らの伝統文化に基づく生活様式を受け入れているからであり、行政面に於ては十数年前に既に政府はヤミ族の人々に近代的住居の無償提供を行い、「生活改進黨策」を具体化させている。前述した「山地問題」とされる三つの例も、より分析を加えるなら、平地人が山人をだますというより、平地人のやり方・性格と山人のやり方・性格の不溝通（中国語で「コミュニケーション」の欠如の意味）によるところが大きい。民国政府は行政レベルに於いて彼らの代表者を議会に送らせ議員とし、大学入試に関しても特別の入学規定を設けて入学の便宜をはかっている。国立台湾大学を卒業し、留学したり教師に任用される山胞も少なくない。しかし、過渡期の現象として特有の、政府の保護がいき届かない所も少なくなく残されている。行政の保護・指導が与えられても、心理的に平地人の住む都市での生活が移住した山人になじまずトラブルの原因を誘発させている事例は少なくない。<sup>(48)</sup>キリスト教会は、かかる平地人と山人の間の溝通をより促進させ、精神的な一致をより一層深めていく役割を与えられているように思われる。民族・国籍・言語・性格の別を越え、愛と信頼に基づく人間間の一致・人間社会間の一致を目指すキリスト教会の、台湾社会

における時代的な役割といえよう。けだし、台湾社会に於けるキリスト教会の側には、派によって宣教対象・宣教方法を異にする所から歩調を必ずしも一にできない事情が存している。天主教・基督教長老派・真耶穌教・安息日派・聚会所派等の分立の状態がそれである。<sup>(50)</sup>しかし、方法論の相違によって歩調を異にするといえども、愛と信頼に基づく人間社会の一致をつくっていくという目的に於ては、志を同じくさせている。台湾社会内の平地人と山地人の溝通促進の問題を諸キリスト教会教派が共通の課題として認識し推進に力を尽くすことは、又、教会教派間の一致（エキユメニカル）を推進させる道ともなりうる。平地教会と山地教会の溝通が促進され、<sup>(51)</sup>山地教会において教会教派間の交流が活発化されキリスト教一致への道が進められていくことは、民族宗教となりつつある山胞（旧高砂族）のキリスト教理解—キリスト教受容への道を、さらに深めさせていくキリスト教土着化（*inculturation*）への道でもある。そして、それは同時に台湾山地同胞が民族として国際化に向かう道（彼らの文化を、個別的なものを保存させつつより普遍的な文化へと高めていく道）<sup>(54)</sup>でもある。

#### 注

刊行年について日本書は日本年号で表記し。中文書は中華民國年号で表記してある。昭和六十三年（一九八八年）は、中華民國七十七年である。執筆時点は、昭和六十三年四月現在。

- (1) 鳥居龍藏—明治二十九年から三十三年にかけて台湾を訪れ、台湾山地同胞（台湾旧高砂族）研究の最大の先駆者である伊能嘉矩・粟野伝之丞両氏の研究を發展させ、ヤミ族を加えた九種族の研究に従事した。主著に「人類学研究—台湾の原住民」(一)序論(二)ヤミ族—『鳥居龍藏全集・第五卷』所収。明治四十三年刊、朝日新聞社。昭和五十一年復刻本刊がある。馬淵東一—昭和六十三年没。台湾帝大在学中より、台湾山地同胞（旧高砂族）の研究に従事。『馬淵東一著作集』一巻—三巻（社会思想社・昭和四十九年刊）に、台湾山地同胞研究の成果が収められている。沖繩・インドネシアの民俗学的研究にも従事された。

- (2) Inez de Beaclair, *Ethnographic Studies—The collected papers of Inez de Beaclair*, 1986, Taipei.  
 主にヤミ族に関する文化人類学的視点からの研究論文が収められている。
- (3) 主にカトリック神父の手による研究が多く、最近では台東地区（アミ族・パイワン族・ヤミ族地区）の司牧宣教に従事するスイス宣教会 (Societas missionarias de Bethlehem) の Hans Egli 神父のパイワン族に関する研究 (*Das Schlangensymbol*, Walter Verlag Olten, 1982, *Mirrimingan Die Waage*, Zürich, Kiehlberg 1988) 及び神言会 (SVD) の Schröder Dominicus 神父のブトヤ族研究 (“*The Puyuma of Katipal and Their Religion: A Brief Field Survey Report*” Bulletin of the Department of Archaeology and Anthropology, National Taiwan University, 1967, 29—30: 11—39.) 等がある。他に次の二研究が著せられている。Nettleship Martin A, *Background to an Experiment in Applied Anthropology Among the Atyal of Taiwan*, London University, 1971. Gates Hill, “*Dependency and the Part-time Proletariat in Taiwan*”, *Modern China* 5 (3): 381—408.
- (4) 主要九族の言語とは、アタヤル（タイヤル）・サイシャット・シウオ・パングツアハ（アミ）・ルカイ・バナバナヤン（ブユマ）・パイワン・ヤミ・ブヌンの各語である。種族の分類については、明治33年山地同胞研究最大の先覚者伊能嘉矩・粟野伝之丞両氏によって熟蛮平埔族を含めた八種類が分類されたが、後に鳥居龍蔵氏により平埔を除きシウオとヤミを加えた九種に分類された（『鳥居竜蔵全集・五巻』九—十三頁）。馬淵東一氏も九族に分類されている（『馬淵東一著作集・一巻』二二—二七三頁・同著作集・二巻』二四九頁—四六〇頁。五〇三—五一八頁）。高淵源編著『台湾高山族』（香草山出版・民国六十六年）二五頁）。黄応貴「台湾土著族的兩種社会類型及其意義」（『台湾土著社会文化研究論文集』聯経出版・民国七十五年）三頁。
- (5) 日本語文献は、国立台湾大学人類学図書館・国立中央研究院民族学研究所図書館・国立中央図書館分室（旧台湾総督府図書館）に各所蔵されている。後藤新平長官時代から一九八八年の現在に至るまでの文献が収められている。
- (6) 黄応貴編『台湾土著社会文化研究論文集』二七九頁。中国人権協会編『台湾土著の伝統社会文化与人権現況』（大佳出版・民国七十六年）三・六・一四—一六頁。郭文般『台湾光復以後基督宗教在山地社会的發展』（台湾大学修士論文・民国七十四年）二頁。
- (7) 郭文般『前掲書』三頁、一五九頁。林建一『台湾山地教会』（台北・山地宣道委員会・民国六十一年）統計資料。董顯光『基督教在台湾的發展』（台北・民国五十九年）一頁。鄭尼玉「台湾のキリスト教」（鄭他共著『アジア・キリスト教

史』(教文館・昭和五十六年)一〇〇頁。

(8) 日本の神道は、国家宗教として強制されたものとして中国では扱えられている。(台湾長老教会『台湾長老教会百年史』《台湾長老教会、民国五十四年》二〇六頁。)従って、中華民國側から書かれた資料には記載されていない。しかし、教育教化の面から日本精神の善い影響を指摘している資料もある。(郭文毅『前掲書』四六一―四八頁。)

(9) 史文森『台湾教会面面觀』(台湾教会促進会、民国七十一年)三五頁。郭『前掲書』十五頁。

(10) プロテストアント総計の統計は、史文森『前掲書』五二頁の資料、及び羅曼華編『華人教会手冊』(世界華人福音連絡中心・民国六十九年)二九・四三頁の資料を基にしている。カトリック統計は、中華民國主教団『台湾天主教手冊』(光啓出版・民国七十五年)六二頁の資料を基にしている。総信者六十万と山人信者約二十五万の比率は四割となる。

(11) 民国六十九年版の『華人教会手冊』には、台湾人75%・外省人13%・客家人10%・山胞2%と記されている。

(12) 領台後の以上の統計資料は、喜安幸夫『台湾統治秘史』(原書房・昭和五十六年)一五七―八頁。李亦園『台湾土著民俗的社會与文化』(聯経出版・民国七十一年)の統計資料とは若干違いがある。

(13) 台湾長老教会『前掲書』二〇六頁。

(14) 同右・二〇六一―二〇九頁。

(15) 同右・二〇八一―二〇九頁。三六五―四六二頁。

(16) 鄭妮玉『前掲書』六九―一一頁。

(17) 李亦園『前掲書』三八―一頁。郭文毅『前掲書』一六一―一九頁。各信者統計の原資料は、「台湾天主教手冊」民国七十二年版、「台湾長老教会一覽表」民国七十二年版、「真耶穌教会台湾伝教五十年紀念刊」民国六十五年版、「真耶穌教会教勢一覽表」民国七十一年版、李亦園『山地社會問題』(楊国枢編『台湾的社會問題』巨流圖書、民国七十三年)二五〇頁に依拠する。一九八七年度の天主教信徒数は天主教主教公署の推定数・山人人口は政府の推定数。他の教派はまだ発表されていない。郭文毅論文においても、教会側の一資料を引用する場合、キリスト者人口比を80%とし、政府の統計資料と学術上の資料を併せ提示する場合80%・73%・61%としている。この数字の矛盾は、調査方法の違いに基づくものと思われるが、ここではその調査結果のみを提示しておくことにする。

(18) 資料由来は注17の資料と同じ。

(19) 史文森『前掲書』三三―三五頁。長老教会『百年史』各資料。中国主教団『天主教在台湾現況之研究』(光啓出版・民国

- 七十六年）一頁。
- (20) 鄭兪玉『前掲書』七六頁。
- (21) 黄応貴編『台湾土著社会論集』十二―十四頁。李亦園『台湾土著民族的社会与文化』（聯經出版・民国七十一年）三九〇―三九一頁。
- (22) ヴァン・ジエネツプの用語。儀礼としての宗教行為の役割については、W・コムストック『宗教』柳川啓一訳（東大出版会・昭和五十一年）五三一―〇一頁参照。
- (23) 中国主教団『天主教在台湾』二八頁。郭文般『前掲書』六一―六二頁。黄応貴「東埔社の宗教変遷」（黄応貴編『台湾土著論集』三一―七頁）。
- (24) 中国主教団『天主教在台湾』二頁。
- (25) 郭『前掲書』五三一―五四頁。
- (26) 拙論文「中華民國台湾のキリスト教と國際文学宗教会議」（『福音宣教』昭和六十二年三月号）五四頁。拙論文「中華民國と日本人」（『世紀』昭和六十三年二月号）七一一―七四頁。
- (27) 郭『前掲書』五三一―五四頁。黄応貴「前掲書論文」三〇―六頁。「見証專題」（『見証』民国七十六年十一月号）十頁。
- (28) 「霧社事件」以下の記述は、郭『前掲書』四四―四五頁・四八―四五頁、に基づく。
- (29) 黄応貴編『前掲書』の各論文。例えば、黄応貴「台湾土著族社会類型」同「東埔社の宗教変遷」喬健「卑南族呂家社祖先制度之研究」陳茂泰「從早田到果園。石磊」馬蘭阿美族宗教信仰的變遷」（中央研究院集刊四一号・民国六十五年）。
- (30) 郭『前掲書』二五―二六頁、六一―六二頁。  
黄応貴「東埔社の宗教変遷」三〇―六頁。
- (31) 郭『前掲書』六二頁。
- (32) 同右。
- (33) 同右。
- (34) 同右。
- (35) 史文森『前掲書』八二頁。
- (36) 真耶穌会青聚教材委員会『真神与救恩』（真耶穌会台湾總會印行・一九八七）五二―五四頁。

(37) 史文森『前掲書』八四―八五頁。

真耶蘇会『真神与救恩』五七頁。

郭『前掲書』二六、五六、六四頁。

平地人に対する山胞の團結を促進させたことと、熱心な信仰が世俗化の影響を上回ったことが記されている。(会の特徴の記述、八一―八六頁。)なお、一九八七年四月までの教勢は次の通り。平地教会九十一、山胞教会一一一・信者四万百名。聖職者三四二名。国外教勢、米・韓・印・インドネシア・マレーシア・英・ナイジェリア等及び三万八千の信徒を数える。日本にも四ヶ所の教会がある。(『真神与救恩』六一―六四頁)

(38) 郭『前掲書』五九・六二―六四・六六―六七頁。

瞿海源「台湾山地郷的社会経済地位与人口」(『中国社会学刊』七号・民国七十二年)一五九頁。

史文森「前掲書」三九―四二頁。中国主教官「天主教在台湾」二頁。

一九八七年度一人当りのGNPは約五千ドル、大陸中国が三二〇ドル、韓国が二八〇〇ドルであるのに比べ、著しい伸びを示している。

日本のキリスト教会と台湾のキリスト教会の同様の傾向を経済と宗教との関係から論じた資料として、拙論「中国福伝大会と日本福伝大会―経済和宗教」(『鐸声』民国七十年四月号)四一―四五頁・(中国語使用)がある。

(39) 郭『前掲書』五七―五九頁、一六〇頁。

(40) 郭『前掲書』五九―六三頁。

瞿海源「前掲論文」一一五九頁。廖文生『台湾山地経済結構性変遷之探討』(台湾大学社会学系修士論文、民国七十二年)一―三頁。台湾本島から離れヤミ族の居住する蘭与島(日本時代は紅頭嶼と呼ばれ、今も年輩の人はこの名称を用いる)は、社会変化が最も緩慢に進んでいる場所である。政府は十年前無償で近代的住居を提供したが、年輩の人々は堅穴式に工夫した住居に居住し、老人の男子は今も不帯を着用している。水道設備も備えられているが、共同で米ときや水浴をするしみすが併用して用いられている。蘭与の生活を唯一の例外として、現在すべての旧高砂族の生活は市場経済の導入により多大な生活上の変化に遭遇している。筆者も蘭与を訪れたが、宣教師として定住したエグリ神父の中文の資料は、十数年前までの状況をよく伝えている。H. Egli(文格理)『蘭嶼之旅』中華彩色社・刊行年は記入されていない。

(41) 黄応貴「光復後高山族の経済変遷」(黄応貴編・前掲書)一六四―一七〇頁。

- 李亦園は山胞青少年の都市への移動に伴う社会問題を指摘している。（李亦園『台湾土著民族的社會与文化』四二五―四六〇頁。亦、教育と職業の問題から移住した山胞が、平地や都会でどのように適応しているかについての分析を試みている。（李亦園『前掲書』四〇二―四二三頁。さらに許木柱も分析を試みている。（許木柱『阿美族的社会文化変遷与青少年適応』中央研究院・民国七十六年、八七一―一五五頁。
- (42) 簡春安「目前台湾的社会問題」、『善導周刊』民国七十六年八月）十頁。中国人権協会『台湾人権現況』三〇―一三三六頁「雛妓奴隷顛天録」、『人間』民国七十六年三月号）八一―三三頁。実数はそれほど多くはないが、近年マスコミで大きく取りあげられたことから、クローズ・アップされるに至った。しかし、これらの事件の真相は、加害者・被害者という関係より両者（山人と平地人）の性格・やり方の相違にもとづく誤解・コミュニケーションの欠如による所もある。
- (43) 中国主教団『福伝文集』（光啓出版・民国七十六年）二二六頁。
- (44) 「湯英伸救援行動始末」、『人間』民国七十六年六月号）一八一―四三頁。高英輝「讓他活下去」、『鄒季刊』民国七十六年二月十八―二二頁。
- (45) 「湯英伸救援行動始末」四二―四三頁。
- (46) 中国主教団『福伝大会提案』（民国七十六年十二月）資料、五、二二―三三、二六―三〇頁。
- (47) 国父遺教『三民主義』三民書局・民国七十四年版・一頁（三民主義の概念）。三四―四八頁（真の世界平和―即ち大同主義思想を、中国の運命を論述しながら説いている）。
- 孫文は、世界各国の民族の平等を論じつつ、中国内の各民族の平等をも論じ、中国伝来の「平天下・大同思想」とキリスト教の普遍的世界主義の統合を目指した。
- (48) 中華民國憲法・第一章総綱第五條（民族平等）『中華民國各民族一律平等』
- (49) 李亦園『台湾土著民族的社會与文化』四二〇―四二三、四三〇―四五〇頁。許木柱『前掲書』一四九―一五〇頁。中国人権協会『前掲書』二二六―二五一。同協会は、現実に山胞労働者が危険な労働・長時間低賃金労働をさせられている多くの実例を指摘し、その行政面と精神面双方における条件の改善の為の具体的建議を行っている。
- (50) この他に、キリスト教の精神をくみ入れ、既成宗教と混合させた民間宗教として一貫道がある。これは釈迦・孔子・老子・マホメット・キリストを共に聖人として敬う台湾の民間新興宗教で、百万を越える信者を擁する。理教もキリスト教を教義としてとり入れている民間宗教であり、普及をみせている。「台湾省諸宗教特刊」、『鐸声』民国七十六年、六五―六八頁。

(51) 台湾に於けるキリスト教伝道は、山地と平地が区別され伝道されていた為、交流はあまり促進されなかった。

(52) 台湾に於けるキリスト教各教派間には、未だ対立関係も残されており、エキユメニカルへの道は端緒にあるといえる。

(53) 郭『前掲書』一六五頁。

(54) 台湾山地同胞（旧高砂族）の文化遺産を国際化へ繋げる道は日本の文化を国際化へ繋げる道と軌を一にさせるものである。郭論文は、土着化の意味を山地人の台湾社会への土着化に解させたが（一六六一―一七〇頁）さらに国際化に進ませる道を示唆させたいと思う。